

マーシャル『産業と交易』¹の進化経済学

岩 下 伸 朗 (福岡女学院大学)

1. はじめに

マーシャル (Alfred Marshall, 1842-1924) 経済学は、理論的なアプローチから長い間、部分均衡価格論の体系と位置づけられていた。その後、分配論の特徴が注目されると、「人間的進歩」と「経済的進歩」とのスパイラルな展開による「有機的成長」の特質が重視されてくる。この理解には、彼の「経済生物学」の主張や進化論的な認識への再評価の視点がオーバーラップしてもいた。ただ、こうした評価の多くは、『経済学原理』² (以下『原理』) を主要な対象としてなされることが多かった。しかし、比較的最近では、『原理』に先行する『産業経済学』³に、さらには、彼が本格的な経済学研究を開始する以前の諸論考の思考や思想に、光が当てられている。とくに後者に関する研究の中には、マーシャルの青年期の心理学的考察に、すでに「進化論的」認識が読み取れる、と指摘するものもある⁴。こうしてマーシャル体系の「進化経済学」としての性格に本格的な注目が向けられている潮流にあって、あらためて彼の第2の大著『産業と交易』にも関心が高まっている。

本報告では、こうした研究潮流を受けつつ、マーシャルの「経済生物学」は、けっして単に方法論的構想の次元に留まっているものではなく、『原理』を始点とし、とりわけ『産業と交易』においてより具体的に展開されていることを確認する。これによって、「進化経済学」としてのマーシャルの基本的特徴の内容も改めて明確になってくるのである。

2. 進化論的視角と『産業と交易』の問題

『産業と交易』は、「産業技術と企業組織の進歩」の研究であり、また「それによって生まれた利益の、国民諸階層間ならびに、さまざまな諸国民間での分配」(IT, p.1)の研究であった。『原理』の続編である⁵この研究には、自然環境、民族性、組織、技

¹ A. Marshall, *Industry and Trade*, Macmillan, 1919. 永澤訳は『産業と商業』(岩波ブックセンター信山社, 1986年)とされているが、本報告では標記をとりたい。

² A. Marshall, *Principles of Economics*, 9th (variorum) edition with annotations by C. W. Guillebaud, Macmillan, 1961. (永澤訳『マーシャル経済学原理』岩波ブックセンター信山社, 1985年)

³ A. Marshall & M. P. Marshall, *Economics of Industry*, 1879. (Thiemmes Press, 1994.) (橋本昭一訳『産業経済学』関西大学出版会, 1985年)

⁴ T. Raffaelli, *Alfred Marshall's Evolutionary Economics*, Routledge, 2003.

⁵ ケインズは、『産業と交易』を、『原理』とはまったく異質な著作であり、またその論理展開は恣意的であると断じていた。(「マーシャル伝」)

術、知識などをめぐり、より多岐にわたる実証的な叙述が多くなされている。そうした多面的な研究の展開を基底でささえているのが、マーシャルに独自の進化論的なアプローチであった。彼の進化論自体に対する基本的認識は、『原理』第4編においてと共に、とくに『産業と交易』第1編9章「産業と交易の現在の諸問題への移行」に見られる叙述から確認することができる⁶。

マーシャルは、青年期にダーウィンやスペンサーの進化学説に接していた。それらを含め同時代に発展していた生物学の方法を受容し、形式的なアナロジーを活用するとともに、生物有機体と社会有機体との実質的な連続性の面を重視してもいた。ラマルク流の「用不用」説も限定的には容認しつつ、とくに動植物界にみられる集団組織的特性（蟻塚や蜂の巣を例示）が高度化していく直接的延長線上に人間社会の諸集団や組織があると認識している。こうした集団性に関して、マーシャルは、個々（個体）の「利他的」な活動とそれが属している集団が示す「適応」との関連を指摘して、個の「利他的」活動がその集団の「適応」を実現している側面を重視している。そのうえで彼がさらに強調しているのは、こうした「利他」性は、動植物においては「本能」に依存しているにすぎないが、人間社会では、人間の「意識」的な活動によって左右されているということであった。

さらに、人間社会での諸活動を担い、「環境」に対する「適応」の主体となっているのは、なにも人間個人のみではない。血縁的家族、地縁的な村落共同体、封建的軍事的組織、民族や国民国家、そして企業や産業組織、とさまざまなレベルの主体が存在している。「最適者生存の法則」は、こうして人間の意識的「適応」の側面を含みつつ、さまざまなレベルで、それぞれに作用し貫徹している法則なのである。しかも、それぞれのレベルにおいて「環境」に「適応」する過程が、その「環境」を変化させていくし、その「環境」が別のレベルでの「適応」主体でもあるという重層性をもっている。「最適者生存の法則」の貫徹は、人間社会のさまざまなレベルで捉えられるのであり、そうした各レベルでのいわば「環境と適応の相互作用」の重層的な関係全体をとおして社会は連続的で漸進的な歴史過程⁷を積み重ねてきたのである。こうした視野をもつマーシャルは、とくに市場（貨幣）経済社会レベルでの「最適者生存の法則」の意義だけでなく、そこに孕まれる社会有機体の「進歩」を阻む制約性をも意識していた。そのうえで社会総体における「進歩」の方向を見据えているのであった。

このような進化論的スタンスに立って、とくに『産業と交易』全体での問題として

⁶ 『原理』では、第4編「生産要因」第8章「産業組織」において進化論へ直接的認識が展開されている。遺伝学の隆盛に対する言及等を除いて、その認識は基本的に変化してはいないといえる。

⁷ たとえば、「産業革命」について「実際そのときに起こったのは革命ではなかった。それはほとんど数百年間中断なく進行してきた進化のほんの一段階にすぎなかった。」

(17, p. 9)

意識されている側面が、序文で次のように示されていた。

「本巻では、主に、部分的で階級的な自愛心になお作用している影響を取り扱っている。つまり、他者にもっとも有利となるように個人の行為を向けさせる利己心の傾向が限られていることを取り扱っているし、また、被雇用者たちによるのと同様に、資本家たちやその他の企業家たちによる、産出量を規制するといった連合的な行動が、つまり一般的には、国民的な利益よりもむしろ、部分的な利益への欲望による行動が、なお残存している傾向を取り扱っている。これらの問題での人間の希望と恐れとが、第3編の大部分の根底にはある。それにとって、第1編と第2編は序論なのである。」(IT, p. viii)

3. 「経済的進化」と『産業と交易』の展開

周知のように、『産業と交易』第1編は、自国イギリスの凋落を意識したうえでの「産業上の主導権」の変遷をめぐる丹念な歴史的叙述であった。その分析は、列強＝「国民国家」をいわば、「適応」主体に据えたレベルで、それぞれの時代においてその「主導権」を支えていた特徴はいかなるもので、それはどのような自然的環境および人的特徴（民族性や国民性）によって支えられていたのか、に向けられている。歴史的な「産業上の主導権」の問題の整理は、それにとりもなう具体的な「経済的進化（economic evolution）」の一般的ベクトルの確認でもあった。このベクトルを踏まえながら、第2、3編において「経済的進化」の現在の状況とそこに見られる問題点が論じられている。しかも、歴史的回顧と現代の問題との「橋渡し」と位置づけて第1編第9章が設定されていることには、『産業と交易』全体の進化論的展開のスタンスがよく反映されてもいる⁸。

第2編は、市場での適応主体である企業組織の実態に視点をすえて、それが「自由な市場（open market）」においてどのように大規模・巨大化しているのかが確認されている。企業体が担う需給均衡の論理が（流通の側面に重きがおかれつつ）まず再確認されている。そこから、「自由な市場」での企業の特質や最近の特徴が具体的に、各国、各産業地域での生産と流通両部面での産業技術、企業組織の比較によって肉付けされている。「自由な市場」にあって、地域的・空間的には限定された中で、人間主体の意識的な活動がストレートに作用し、それに担われた比較的小規模な個々の企業が絡み合い、一方で相互に依存性を高めつつ、かつその中で「競争」が繰り広げられているような状況が、マーシャルの原風景であった。それは『原理』が当初想定してい

⁸ 各編での展開構成の点でも、まず一般的抽象的論理を確認したうえで、具体的実証的内容の分析が続いて論じられる。対象の論理的骨格を確認したうえで、それを基準としてつ肉付けしていくという展開が常に一貫している。

た産業状況でもあった。とくに諸企業の地域的集中化により、その「適応」主体と「環境」とが総体として特有の「雰囲気」を形成しているような「産業組織」の状況であった。しかし、「経済的進化」はそこからさらに展開し、より多くの産業部門で巨大企業やその連合体を生み出してきた。それらの独占的組織体によって、多くの市場が「統制されて(controlled)」いるのがより最近の現実の姿であった。

そうした変容過程での一般的な特徴は、産業技術的「標準化」や「科学的知識」の進展であり、それにも起因してますます大規模化する生産部面と流通部面双方の企業体に必要な資本量の増大であった。これによって、産業構造は重化学工業化の傾向をすすみ、運輸・交通産業はますます世界的に発展していた。そうした産業活動に必要なエネルギーもこれに応じて（蒸気力から石油・電力へと）シフトしていた。こうした産業技術的「環境」変化の中にあつて、それを担い、推進していく企業や産業上の「組織」の発展は、「適応」主体の大きな部分を構成する雇用労働の質的変容も生み出している。それは一方では徹底的な単純不熟練化を、他方では経営的業務への頭脳労働(者)の形成、という2極化の傾向である。こうした変化は、以前ならば中小企業の地域集中化がもたらしていたような「外部経済」性をも、個別企業が「内部経済」として組み込んでいる過程でもあった。それに応じて、企業形態の進化としての「株式会社」の発展と普及も進んでいた。こうして「統制された市場」として独占的傾向が生み出されていた。

第3編では、独占組織体の支配力が価格に与えている影響について、運輸流通部門

『産業と交易』 (1919, 2nd 1919, 3rd 1921, 4th 1923)

序文

第1編 産業と交易の現在における諸問題の起源

- 第1章 序論的な概観
- 第2章 産業と交易の一般的関係
- 第3章 イングランドの産業上の主導権の基礎。大量生産への流れ
- 第4章 イギリスの産業上の主導権。その長期わたる挑戦のなさ
- 第5章 強力な挑戦を受けつつあるイギリスの主導権
- 第6章 フランスの産業上の主導権。第生産における個性と繊細さ
- 第7章 ドイツの産業上の主導権。産業に有用な科学
- 第8章 合衆国の産業上の主導権。多様な標準化
- 第9章 産業と交易の現在の諸問題への移行

第2編 企業組織の支配的な諸傾向

- 第1章 自由市場での需要に対する生産の調整
- 第2章 産業技術が組織的な記録と標準化に負うもの
- 第3章 代表的な企業単位の規模への若干の技術的影響
- 第4章 代表的な企業単位の規模へのその他の技術的影響
- 第5章 建設的投機、組織化された(農)産物市場
- 第6章 一般的な販売の若干の主要問題
- 第7章 一般的な販売の諸問題、統論。大規模小売店
- 第8章 企業組織。株式会社の発達とその影響
- 第9章 企業組織。その金融的基礎
- 第10章 企業組織。課題と必要とされる能力
- 第11章 企業組織。科学的方法の適用
- 第12章 企業組織。科学的方法の適用、統論

第3編 独占的諸傾向。公共の福祉との関係

- 第1章 独占が価格に及ぼす影響
- 第2章 独占が価格に及ぼす影響。統論
- 第3章 運輸における競争と独占
- 第4章 運輸における競争と独占。統論
- 第5章 運輸における競争と独占。統論
- 第6章 運輸における競争と独占。統論
- 第7章 トラストとカルテル。アメリカの経験
- 第8章 トラストとカルテル。アメリカの経験。統論
- 第9章 トラストとカルテル。ドイツの経験
- 第10章 トラストとカルテル。ドイツの経験。統論
- 第11章 イギリスの産業と交易における集合体。連合および協同
- 第12章 イギリスの産業と交易における集合体。連合および協同。統論
- 第13章 イギリスの産業と交易における集合体。連合および協同。統論
- 第14章 産業における排他的な階級的利益の衰退

付論 A—P

に関して、その大きさを検討したうえで、ドイツ、アメリカ⁹で顕著となっている諸企業の連合や集成についてその具体的特徴が論じられている。そこではイギリスの後進性がとくに意識されている¹⁰。そのイギリスの現状との比較の視点を持ちながら、トラストとカルテルにおける「独占的傾向」の特性が論じられている。

マーシャルは、一方で「自由な市場」と「統制された市場」とを、歴史的にも論理的にも連続的する相対的なものと捉えている。その上で、それぞれの市場での「組織がどの程度一般的な福祉を促進する傾向があるか」(IT, p.180)を対比していた。こうした対比によってイギリスの特性をあらためて確認することにより、なお残存する国民内部での「部分主義 (sectionalism)」= 階級的利害対立の解消の方向を模索しているのであった。

4. 「社会進歩」の前提と展望

「経済的進化」による「自由な市場」から「統制された市場」への展開においても、マーシャルは一貫して市場経済自体のもつ生産力向上機能は信頼していた。そこでの市場競争観は、「経済的自由 (企業と産業の自由)」の文脈で理解されるものだが、それは、ちょうど協同して山を登る際のような「競い合い」の關係に相応したものであった。

しかし、現実の経済社会においては、「部分主義」残存の側面とも重なりながら、独占的組織体の中には「破壊的」な競争によって、市場の自律的調整機能を麻痺させて、「経済的進化」のドライブを喪失させかねない状況が生じてもいる。それゆえ、建設的な「競争」を確保し、市場の調整機能自体が十全に作用する環境を整えて、「経済的進化」の枠組みが保全されなければならない。それが時代における政府の新たな役割なのであった。政府は、市場経済が本来もつ「自然治癒力」を回復させるために、それを麻痺させている破壊的性格の「独占」体はこれを規制し、解体しなければならない。さらに、市場の機能自身が確保されている場合には、そのより円滑な機能実現に向けて、さまざまな「情報」の公開流通を推進する役割も政府には期待されている¹¹。

⁹ 「19世紀の末葉にアメリカの産業で主要な地位を占めた人々は、イギリスの産業が数世代以前に経験したのと同様の変革の時期を生きた人々であった。」(IT, p. 359)

¹⁰ 「ある種のイギリスの企業家たちに時折見受けられるもので、産業の適切な発展には必要だが、単一の企業にとってはあまりにも大規模である仕事に自分たちの努力を結合することには、理由もなく消極的であることの原因として非難されている。」(IT, p. 583)

¹¹ 「身体的な不調にかんして、医学的処置での主要な成功は、自然の治癒諸力に自由な役割を与えるような諸手段によってもたらされていた。人間の行動に関する自然の治癒諸力の主要部分は知識である。それゆえ、社会的トラブルへの当局の有効な干渉のほとんどすべては、自発的であれ、強制的であれ、その争いに関心のある人々の幾人かは、自発的には提出したがらないような情報を獲得し、それを公開することでもって始まる。」(IT, p. 442)

「経済的進化」を促進していくドライブは、なお「市場経済」のもつ力学にある。市場機能によって保たれている社会生命体の骨格を基本的には信頼するがゆえに、それは具体的にはどのようにして保持されるか、が問題であった。実際、第3編ではそうした視点は、20世紀に入り大衆社会化をより進めていたイギリスでの政治的民主主義制度の枠組みや官僚制度の問題点、政府自体のコントロールの議論にまで及んでいる。しかし、そうした議論展開に並んで、『産業と交易』の最終部分には、つぎのような叙述も置かれている。

「人間の生活の状態には急激で大きな改善はありえない。というのも、生活の状態が人間を形作るのと同様に、生活の状態が人間を形作っているからである。また人間自身は急速に変化することができないからである。しかし、人間は、高貴な生活の機会がすべての人に接近できるような遠くの目標に向かって、着実に前進しなければならない。」(IT, p.665)

あらためて、「生活の状態」と人間自身の活動との相互スパイラルな関係の漸進的な進展関係が、確認されている。そのうえで、「高貴な生活」の浸透が求められている。ここでの「高貴」さにマーシャルが込めていることは、単に経済的物質的成功という基準での意識的「適応」の高さではなく、他者への配慮をも含んだ「利他的」活動を包含した意識的「適応」の高さなのであった。そうした社会的「意識」を、マーシャルはすべての国民階層に対して要請するのである。それは、なおイギリス社会に残存する「部分主義」の克服こそが、その「産業上の主導権」の復活の鍵である¹²と考えているからであった。一切の飛躍を認めないマーシャルの特徴は、自分自身の思考内容の堅持の側面でも当てはまっているようである。

『産業と交易』の直接の「目的は、経済学の一分野について、できるだけ正確な描写を提供することであって、なんらか特定の結論を主張するものではない」(IT, p. v)とされていた。しかし、「正確な描写」というのは、ただ単に歴史的事象自体をそのまま単純に拾い出すということではなかった。それは、基底に「最適者生存の法則」の歴史的で輻輳的な貫徹の視座を踏まえながら、『原理』で確認されていた基準に照らして、現在に至っている市場経済社会の特徴の検証作業であり、それに基づく将来展望のために必要な「正確な描写」なのであった。『産業と交易』は『原理』の続編として、その論理展開の方法の点においても、またその具体的内容の側面においても進化論的特徴とスタンスによる「経済生物学」の具体化にほかならない。

¹²より具体的なレベルでは、イギリス国民の特性を活かすには中規模産業部門への特化がそのための道であるとマーシャルは考えていた。